

パンドラの箱と幽霊

福島大学人間発達文化学類 教授

飛田 操 (ひだ みさお)

Profile—飛田 操

1987年、学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得退学。文教大学人間科学部助手、福島大学教育学部助手、講師、助教授、教授を経て、改組により現職。専門は社会心理学。



とてつもない幽霊が現れてしまったようだ。

正体がわからないし、得体がしれない。何しろ不気味である。健康被害がもたらされる可能性があるのだろうか。避難する必要があるのだろうか。

幽霊が存在するかどうかは、科学的な認識の話であろう。したがって、幽霊が存在するのか、しないのか、科学的な「正解」が存在するはずである。自分で調べられるのなら、確かであろうが、専門外の領域のことは、ほとんど理解できない。だから、その分野の専門家の意見をよりどころにする。多くの専門の科学者は、「存在しない」という。おそらく、存在しないのだろう。

ところが、一部の科学者は、「可能性はゼロではない」という。どちらを信じたいのだろうか。さらに、「政府や科学者にダマされるな。彼らは本当の情報を隠蔽している」と言い出す人まで現れている。政府やマスコミへの信頼も失われつつある。SNSでは、マスコミの報道が批判されている。では、私たちは、誰を信じればいいのかのだろうか。

「幽霊が存在する」と声高に主張して、金儲けしたり、売名行為を図ったりする人もいる。さらに、「幽霊が存在するぞ」と脅かして、人々が怖がる様子を楽しむ不埒な輩も現れる。この人たちにとって、もはや「幽霊が存在するか」どうかは、問題ではない。「幽

霊が存在する」と主張することの効果に意味があるのだ。騒ぎになればなるほど都合がいいので、主張はエキセントリックになる。そして、幽霊はどんどんおどろおどろしいものになっていく。

やっかいなことに、「幽霊が存在するのは、現在の政治体制に問題があるからだ」と、自分たちの政治的信条の実現のために、幽霊を利用しようとする人も多い。本来は、科学の話であったはずなのに、政治的信条の話になってしまっている。信条や価値観は、たとえ相違していても、議論の対象にはなりえない。話し合いにならないのだ。

幽霊が存在したらどうしようと、長期間おびえ続けている人もいる。特に、乳幼児がいる母親のストレスは心配である。今のところは、大丈夫でも、これから先は、どうなるのだろうか。

幽霊が存在するかしないかよりも、幽霊が怖いかどうかが問題なのだと思う人もいる。幽霊が怖いかどうかは、その人のこころの問題である。だから、周囲の人から、どんなに安全であることが伝えられても、怖いものは怖いのである。怖いから、とりあえず避けようとする。この心情に共感する人もいる。一方で、「何故、安全なのに、避けようとするのか」と、その心情を理解できない人もいる。「安全なのだから、避けなくて欲しい」との悲痛なまでの声は、どこまで届いているのだろうか。

か。

もちろん、本当の幽霊の話ではない。言うまでもないが、東京電力福島第一原子力発電所事故にともなう低線量被ばくと、それが健康被害に及ぼす影響についての話である。

福島県浪江町のように、一つのコミュニティが、避難指示解除準備区域と居住制限区域、帰還困難区域に分断されてしまった地域があるのは確かである。また、津波被害を受けたか、人的被害があったかといった被災の程度や内容によって、同じ被災者といっても、いくつかのサブカテゴリーが生じてしまっている。

このような状況的な要因によって、コミュニティの分断が生じてしまったのも事実ではある。

しかし、最も解決が必要とされている分断は、人々が元々保有していた政治的信条や価値観の相違が、東日本大震災、特に東京電力福島第一発電所事故を契機に顕在化してしまったことによってもたらされていると考えられるのではないだろうか。パンドラの箱が開いてしまったのである。ただ、恐れるべきは、箱から飛び出してきた幽霊そのものではなく、その存在をめぐって対立する人々の間での分断なのであろう。



福島大学での除染作業 (2012年3月22日撮影)